

指標的記号形態としての音の研究に向けて
——シルヴァスティンのコミュニケーション理論に基づく試論——
金子 亜美

本論文は、人と人のコミュニケーションを媒介する音声の、指標的（非意味論的・非言及指示的）側面に焦点を当てる重要性を示す作業を通して、音とコンテキストを往来するコミュニケーション理論を、民族音楽研究に導入することを目指すものである。第一節では、コミュニケーションを声が媒介する仕方に焦点を当て、そのコミュニケーションが意味論的コードを共有していない場合にも成立するのはなぜかという問いに、声の意味論以外の側面から答える可能性を見出した、北米言語人類学者らの理論的視座とその分析事例を検討する。第二節では、彼ら彼女らの理論的支柱となっているシルヴァスティンのコミュニケーション理論を概観する。シルヴァスティンは意味論の意味を備えた言及指示的記号形態のみならず、転換子や、イントネーション・声質といった（メタ）語用的意味を備えた非言及指示的記号形態、或いは指標的記号形態が、いかにコミュニケーション出来事の継起において本質的な役割を果たしているかを示した。第三節では、シルヴァスティンのコミュニケーション理論を治療儀礼の分析において参照したブリッグスの議論を取り上げ、その手続きを批判的に吟味する。第四節では、昨今の民族音楽研究に対して、以上の議論にいかなる意義があるかを考察する。とりわけ二〇〇〇年代の民族音楽研究においては、音を包摂する文化に対する視座が強調され、比較的強みとしてあった鳴り響きへの音楽学的研究蓄積が等閑視される傾向がある。他方で、本論文で取り上げたコミュニケーション理論を参照することは、音と、音が指標的関係を結ぶ今ここのコンテキストを往来する方法を確立する上できわめて有効な手続きであるということが示される。